TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

トイブックコレクションシリーズ　ガンダムオペレーション　ア・バオア・クー

ア・バオア・クー レポート

VOLUME 0006

データ編

TOYBOOK

ア・バオア・クー戦とは何だったのか？
The meaning of war in A BAOA QU

ア・バオア・クー戦とは何だったのか？　この問いに簡単に答えるなら一年戦争最大の、そして、最後の戦いであったということになるだろう。ただ、今までの巻で見てきたとおり、地球連邦軍とジオン公国軍という両勢力の戦いが終わっただけでなく、ア・バオア・クーは、さまざまな人間関係にも決着が付いた場でもあったのだ。

また、すべての終わりであると同時に始まりでもあった。一年戦争は、その先幾度も起こる戦争～デラーズ紛争、グリプス戦役、ハマーン戦争などの火種を残すことになったのだ。ア・バオア・クーはグリプス戦役時「ゼダンの門」と呼称されることになるが、まさしく人類を新たな戦いの歴史へ導く門だったのではないだろうか。

シリーズ最終巻となる、この第6巻では、戦後の状況と、新たな戦いへの課程を見てみよう。あわせて、ア・バオア・クー戦のデータをまとめ、本シリーズの結びとしたい。

MOBILESUIT AFTER ONE YEAR WAR

RX-78

ガンダム

神話化した、白いMS

ガンダムに課せられた当初の使命は、"MSとは何か?"というMSの在り様の模索(これは「V作戦」で開発されたMSの共通目的であった)と、それによって導き出された要素を集約した最産MSの雛形となることだった。それは地球連邦軍の主力MS、RGM-79ジムの開発という形で結実し、ガンダムの使命は終わったかに見えた。しかし、限界まで引き上げられた性能や過剰とも思える装備類、そして何よりも最高のニュータイプと呼ばれるアムロ・レイをパイロットとしたことで、ガンダムは"一年戦争最強"とも形容されるスーパーMSとして認知されるに至った。個部隊として使われたことからも分かるように、一年戦争当時のガンダムとWB隊への地球連邦軍上層部からの評価は、その戦果に反比例するかのように冷しくなかった。だが、戦後になってガンダムの伝説的活躍がクローズアップされるに従って、地球連邦軍の一部ではガンダムに対する神聖視とでもいうべき評価が広がり、更に民間でもガンダムの名は取り沙汰されるようになって行く。

結果、U.C.0083のガンダム試作1~3号機(連邦軍中将ジョン・コーウェン指揮下の「ガンダム開発計画」や、U.C.0087のRX-178ガンダムMk-Ⅱ(ティターンズ管轄下)等、ガンダムの直系機が次々に設計・開発される。これらのガンダム・タイプMSはRX-78と同様に、当時の最高級技術を投入されたハイエンド機で、連邦軍内にガンダムに対する並々ならぬこだわりがあったことの証左となっている。その後、単体での大気圏突入能力を持つMSZ-006 Zガンダムや、絶大な火力を誇るMSZ-010 ZZガンダム、完全ニュータイプ対応のRX-93νガンダム等、その時代の先端技術を惜しみなく投入された、新世代のガンダムが誕生して行く。やはり"ガンダム"には、生産性を無視してでも"最強"の担い手となる最先端技術が不可欠なのである。これらの機体は常識では考えられない程の戦果を残し、ガンダムの名は"神話"といっていい領域にまで達することになる。

E.F.S.F./01

E.F.S.F./02

地球連邦軍

「0作戦」において、ガンダム[illegible]は同時期に開発が進められていたガンキャノンが中距離支援型MSガンキャノンであった。接近戦(MS本来の戦闘領域)での決め手に欠いたガンキャノンは、主力MSとはなり得なかったものの、ガンキャノンが切り開いた支援用/砲撃用MSというカテゴリーは、戦時期にあった一年戦争～U.C.0090年代前半頃のMS観、特にパイロットの練度不足とMS運用法の確立に悩まされていた地球連邦軍にとって有用な機体であった(自兵開発MSと支援型MSの開発を、ライバルメンバと後期就手といった世界の運用論の基礎線上、もしくはそのものに置き換えればいいと考えられたのかもしれない)。連邦、ジオンの両軍でキャノン・タイプMSは開発されてはいたが、連邦軍の方が開発に熱心だったのは、その辺りに理由があるのでしょう。

一年戦争では、量産性や整備性等の仕様変更機が量産したガンキャノンだったが、終戦後に純粋な量産機が開発された形跡はない。ガンダムのような"個別的"な強力に乏しかったこともあるだろうが、戦力的価値に非常していた一年戦争後期の連邦軍には、支援機(用途が限定された機体)をゼロから開発する程の余裕はなかったと考えるのが妥当かもしれない。また、支援機事は専用MSではなくても、装備を換装した汎用MSで代替可能であることもガンキャノンに不利な材料だった。これは、終戦後に開発されたキャノン・タイプMSが、RGC-83ジム・キャノンII等の量産期の量産型であり、グリプス期の地球圏MSにおいては新規どころか、一年戦争当時のキャノン・タイプMS(コクピットは360°スクリーンも搭載されていた)が多かった、とかなる推測できる。

その為も連邦軍では、いくつかのキャノン・タイプMSが開発されたが、その絶対数は一年戦争期と比べて圧倒的に少ない上、その中にガンキャノンの名を持つ機体は開発できない。同じ開発のMSでありながら、次々と後継機や次世代が誕生したガンダムやジムと異なり、名のみを残す、過去の存在となってしまったのがガンキャノンだったのかもしれない。

RX-77

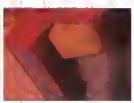
ガンキャノン

MOBILESUIT
AFTER ONE YEAR
WAR

MOBILESUIT AFTER ONE YEAR WAR

RGM-79

ジム



E.F.S.F./03

“永遠”のRGMナンバー

ガンダムで得られたデータをベースに作り上げられたのが地球連邦軍の主力MS、RGM-79ジムである。ジムはガンダムのような超高性能機ではないが、汎用性や生産性、戦闘能力等の主力MSに必要な要素を過不足なく盛り込まれた、シンプルかつバランスの良い機体で、一年戦争末期の連邦軍の戦線を支え、ジオン軍を敗北に追い込む直接的な力となった。

地球連邦軍を勝利に導いたジム・シリーズは、戦後も連邦軍の主力MSとして君臨し続けることになる。一年戦争に投入されたジムの多くは、MSの数を揃えるために粗製濫造された最初期生産型であったこともあり、カタログ通りの性能を発揮できなかったが、生産ラインが安定した一年戦争末期以後、特に終戦後に生産されたジムは、従来のスペックを持つ優秀な機体であった。その代表的な例が、U.C.0080年代前半に連邦軍の主力MSとなったRGM-79Cジム改である（RGM-79N ジム・カスタムやRGM-79Qジム・クウェル等のカスタム機は戦後、開発されている）。以後も、U.C.0080年代中期のRMS-179（RGM-79R）ジムⅡや、0090年代後期のRGM-86R ジムⅢ等の直系機が開発され、ジム・タイプMSは長期間、地球連邦軍のMS戦力の中核として使用された。また、グリプス戦役での反地球連邦政府組織エゥーゴの主力MSであったMSA-003ネモや、U.C.0090年代初期～U.C.0120年代まで連邦軍の中核戦力として運用されたRGM-89ジェガンも、ジムの名こそ持たないが、ジムの系譜に属するMSであった。その後も、U.C.0120年代のRGM-109ヘビーガン、U.C.0150年代のRGM-119ジェムズガン、RGM-122ジャベリン等の“RGM”ナンバーを持つ量産MSが開発されることとなった。ジムⅢを最後に、ジムの名は表面上は聞かれなくなったものの、その血統は常に連邦軍の主力として生き続けている。

Principality of Zeon/01

各陣営で、独自の発展を果たした名機

一連開戦争とルウム戦役において、地球連邦を完全敗北寸前にまで追い詰めた兵器こそジオン公国軍のMS-06ザクⅡである。最初期の実戦型MS、MS-05ザクⅠの後を受けて開発されたザクⅡは、あらゆる面でザクⅠを上回る性能を発揮。一年戦争の全期間を通して、ジオン公国軍の実質的な主力MSとして活躍した。

一年戦争中には、MS-08Kザク・キャノンやMS-06Mザク・マリンタイプといった局地戦タイプだけでなく、MS-06F-2 ザクⅡF2型やMS-06FZザクⅡ改等のマイナーチェンジ機も開発される等、様々な仕様のザクⅡが出現している。ザクⅡシリーズは、一年戦争だけでなく戦後のゲリラ活動においても使用され、地球連邦軍を苦しめることになった。

一年戦争後は、ジオン公国が敗北・消滅してしまったこともあって、ザクⅡベースのバリエーションが新規に開発されることはなかったが、慢性的な戦力不足に悩まされていた終戦直後の連邦軍は、捕獲したザクⅡの系列機を各地に配備している（代表的な例がオーストラリア・トリントン基地のザクⅡF2型や、オーガスタ基地のアウトザクである）。このような流れの中で、機動性等のザクⅡの長所を評価した地球連邦軍は、U.C.0085年にザクⅡに強い影響を受けた主力MS、RMS-106ハイザックを開発。ハイザックは、グリプス戦役期の連邦軍、ティターンズ、ジオン共和国の主力MSとして採用された。また、グリプス戦役が始まったU.C.0087年には、ハイザックの発展形にあたるRMS-108マラサイも登場し、ティターンズの戦列に加わっている（開発はアナハイム・エレクトロニクス社）。

本来の所属軍であるジオンの手を離れたかに思えたザクⅡだが、第一次ネオ・ジオン戦争ではAMX-011 ザクⅢ（ハマーン・カーン指揮下のネオ・ジオン）、シャアの反乱においてはAMS-119ギラ・ドーガ（シャア・アズナブル指揮下のネオ・ジオン）というザクⅡの血統に属するMSが登場し、地球連邦に刃を向けることになる。

MS-06F

ザクⅡ

MOBILESUIT
AFTER ONE YEAR
WAR

MS-14

ゲルググ

戦後のジオン系MSの礎

ジオン公国軍最後にして、最高の主力MSとなったのがMS-14ゲルググであった。ゲルググは、ジオン軍のMSとしては初めてビーム・ライフルを標準装備化した上、連邦軍のビーム・サーベルに匹敵する格闘兵器ビーム・ナギナタを持つ等、ガンダムと互角かそれ以上の性能を秘めた、強力な機体であった。

ゲルググは、終戦直前にようやく本格的な戦力化がなされたMSで、その活躍は極めて限定的なものであったが、他のジオン公国系主力MSと同様、様々なバリエーション機が開発されている。代表的なものが、第2期生産型のMS-14JGゲルググ・J(イェーガー)や、高機動型から派生したと考えられるMS-14Fゲルググ・M(マリーネ)である。特にMS-14Fは、戦後の海賊行為やゲリラ活動(特にU.C.0083のデラーズ紛争)での使用が確認されており、別の意味で最も活躍したゲルググ・タイプMSと言えるかもしれない。

戦後にはゲルググも地球連邦軍に接収されているが、ザクⅡシリーズの様に連邦軍独自のゲルググ系列機が開発されたという事実は確認されていない。これは、ゲルググそのものの数が少なくデータが稀薄しにくかったこともあるだろうが、ゲルググと同等の性能を持つガンダムやカスタム仕様のジムが存在していたため、地球連邦軍としてはゲルググに拘る理由がなかったことも理由の一端であろう(ゲルググの"従兄弟"的な存在であるRMS-117ガルバルディβが、連邦のルナツー戦闘軍やティターンズで使用されはしたが広範なものではなかった)。

対するジオン系組織=ネオ・ジオンでも、MS-14Jリゲルグ以外のゲルググ系発展機は確認されていない。だが、ゲルググで培われた技術、特にビーム・ライフルとビーム・ナグナタ(サーベル)は、後のジオン系MSにも広く採用されており、ゲルググ無くしてネオ・ジオンのMSが完成し得なかったことも事実である。見方によっては、全てのネオ・ジオン系MSはゲルググの子孫であるとも言えるだろう。

NT用巨大MSの行方

ジオン公国軍の事実上の最新MSにして、最初期の実戦型NT用MSがMSN-02ジオングである。ジオングは、サイコミュ制御の有線式連装ビーム砲と多数のメガ粒子砲を装備したハイエンド・マシンである。本来は36m級の大型MSになる予定であったが、建造途中（完成度80%の時点）でア・バオア・クー戦を迎えてしまったため、脚部の代わりに大口径スラスター・ユニットを装備された。この脚部ユニットを排除されたジオングが、ア・バオア・クー戦に投入されたシャア・アズナブル大佐機である。

戦後、ジオングのサンプルが地球連邦軍に接収されたかは不明であるが、データもしくは技術者が連邦軍の手に落ちたのは間違いない。連邦軍に流出したジオングの技術が投入された機体が、連邦軍のNT研究機関ムラサメ研究所にて開発された、強化人間用の巨大TMA（可変モビルアーマー）MRX-009サイコ・ガンダムである。サイコ・ガンダムは、多数のメガ粒子砲、サイコミュの搭載（機体のコントロールに使用）、40mに及ぶMS形態時の全高等、ジオングのコンセプトを色濃く受け継いだマシンであった。ガンダムの顔をしたジオングと言ってもいいかもしれない。サイコ・ガンダムは、ジオングのような有線式サイコミュ兵器は搭載していなかったが、後に開発されたMRX-010サイコ・ガンダムMk-Ⅱでは、有線サイコミュ式ビーム・ソードを装備。更に無線式のサイコミュ兵器、レフレクター・ビットまでもが搭載され、ジオングを祖とする巨大MSは進化の極限を迎えつつあった。

ジオン公国の残党で結成されたネオ・ジオン（アクシズ）は、NT用巨大MSの建造には積極的ではなかったようで、第一次ネオ・ジオン戦争末期に登場したAMX-015ゲーマルクやNZ-000クィン・マンサまで、そのような機体が開発された形跡はない。しかし、サイコ・ガンダムMk-Ⅱを手に入れたネオ・ジオンはそのデータを基に、機体のコンパクト化と一般人用の廉サイコミュの搭載を実現したAMX-014ドーベン・ウルフを開発。ジオングの技術は、ジオンの名を持つ組織に遺元されることなった。

MSN-02

ジオング

MOBILESU
AFTER ONE YE R
WAR

ETC

その他のモビルスーツ

消えていったMSたち

一年戦争後、それらしい後継機を残さずに消えていったMSがいくつかある。地球連邦軍のRB-79ボール、ジオン公国軍のMS-09Rリック・ドムが、その代表的な例であろう。

ボールは、ジムの支援用として採用された機体で、MSに分類されることもあるが、実態としては作業用スペース・ポッドに毛が生えた程度のモノに過ぎなかった。基本的にはジムの後衛を務める機体だったが、乱戦となったソロモン戦やア・バオア・クー戦での損耗率は極めて高く、兵士からの評判は悪かった。それでも、戦力の回復・増強が急務であった一年戦争終戦直後の地球連邦軍では、その高い生産性を評価され、U.C.0080年代前半頃まで改修型が現役で稼動していた。さすがに性能的には限界にあったため、主な任務は後方支援、作業だったようで、U.C.0083のデラーズ紛争ではソーラ・システムⅡの防衛についた程度であった。U.C.0080年代中期には完全に退役したようであるが、未確認ながらもU.C.0130年代にもボール・タイプの機体が存在していたともいわれる。

一方のリック・ドムは、陸戦用のMS-09ドムの仕様変更機であり、それ自体にはMS-09R-2リック・ドムⅡで見られた格度の発展の余地しかなかった。というのも、ドムそのものが誕生した時点で"完成"していたMSであったため、それ以上の改修を受け付けにくい特質を持っていたからだ(ドム・シリーズは後発のMS-09Gドワッジに至っても、初期のドムと根本的な違いはない。第一次ネオ・ジオン戦争では、AMX-009ドライセンというドムの発展形が出現しはしたが、そのコンセプトはドムとは大きく違ったもので、共通点はスタイル程度であった)。また、リック・ドムがゲルググ量産までの穴埋めとして、泥縄的に採用された機体であることも、完全新設計の後継機が誕生しなかった一因であるかもしれない。リック・ドムは一年戦争後期のジオン軍を支えはしたが、はやり急場しのぎの派生型でしかなかったのかもしれない。

TOYBOOK COLLECTION SERIES

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クーレポート

VOLUME 0006

データ編

ア・バオア・クー戦から終戦協定に至るまでの概略

ア・バオア・クーへの道

戦争[illegible]も言[illegible]さ[illegible]戦に[illegible]オ[illegible]軍を下したことで地球[illegible]ミリタリーバランスは地球連邦軍に大きく傾いた。これをきっかけに各地で敗走を始めたジオン軍は、北米とアフリカの残存戦力を結集し、連邦軍の本拠地ジャブローを攻撃する。U.C.0079年11月30日、ジャブロー攻略戦である。しかし、この乾坤一擲の一撃を持ってしてもジャブローの厚い防御網を抜くことはできず、ジオン軍の地上での敗北は決定的なものとなってしまう。

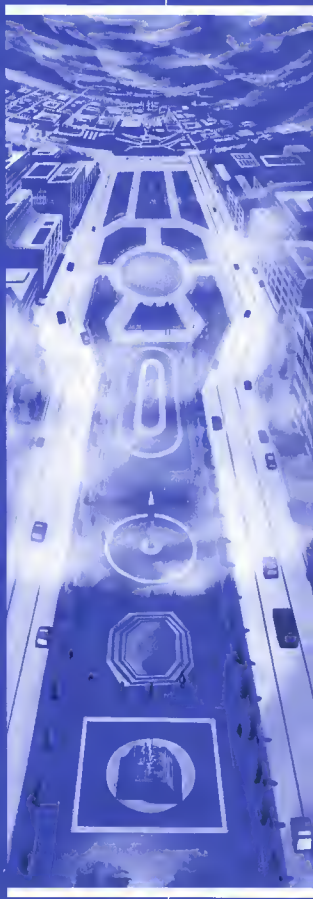
その間にも、連邦軍はビンソン計画による宇宙艦隊の再建と、主力MSガンダムの大量生産と配備を進める。対するジオン軍は、事実上地球を放棄し、宇宙要塞ソロモン、月クラウダ基地、宇宙要塞ア・バオア・クーからなる本土防衛ラインを形成し、防衛体制を固めていた。

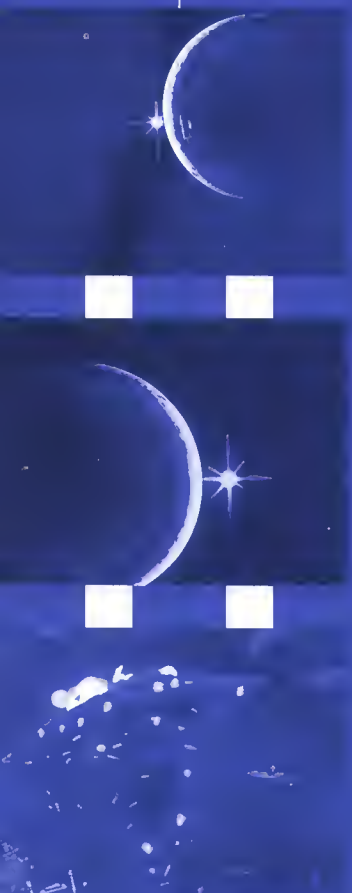
そして12月24日、宇宙へと前線を移した連邦軍はトスル・サヒ中将指揮下のソロモンを陥落させる。この戦いでトスル中将は戦死、連邦軍も宿将ティアンム中将を失うが、ジオンの本土防衛ラインの一角を崩した連邦軍は、星一号作戦を発動。目標はア・バオア・クーであった。

ア・バオア・クー戦：序章

地球連邦軍の目的＝ア・バオア・クー攻略を看破した総帥ギレン・ザビが、秘密兵器ソーラ・レイの準備を進める中、公王デギンはダルシア首相との密談の後、独自に連邦軍司令官レビル大将との和平交渉に臨んだ。ジオン公国の勝利は無いと判断したデギンは、無用の流血を避けるため独自の行動を起こしたのだが、ギレンは何故か勝利を確信していた。デギンの動きを察知したギレンは、ソーラ・レイをゲルドルバ照準で発射。射線上のレビル指揮下の連邦軍第1大隊と、デギンの乗艦グワジン級戦艦グレート・デギンを消滅させてしまう。

この結果、連邦軍は司令官のレビル大将を失った上、戦力の1/3を喪失したが、12月31日00時00分、星一号作戦の継続を決定。残存艦隊を再編すると、第2大隊と第3艦隊からなる主力部隊をア・バオア・クーのNフィールドへ、ルザルを旗艦とするルザル艦隊をSフィールドへと差し向ける。ルザル艦隊には、第13独立戦隊も含まれていた。一方のジオン軍は、総帥ギレンが得意の演説で将兵を鼓舞する中、MS搭載数182機という巨大空母ドロスをNフィールドへ配置し、連邦軍を迎え撃つ。一年戦争最後の会戦の戦端が開かれようとしていた。





ア・バオア・クー戦：混戦

連邦軍はまずNフィールドへの攻撃を開始する。パプリク突撃艇による先制攻撃をし掛けた後、第2、第3艦隊をもってア・バオア・クーへと進攻したが、要塞からの砲火と空母ドロスを中核とする艦艇群、そしてそこから発進したMS部隊によって、足止めを受けてしまう。連邦軍もMS部隊を展開したが、ジオン軍がSフィールドの戦力の半数をNフィールドへと移したことで、連邦軍は次第に消耗して行った。

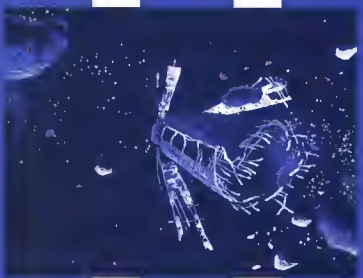
この状況に変化が訪れたのが、Sフィールドへのルザル艦隊の侵入である。Nフィールドへ戦力を振り向けた結果、Sフィールドは手薄になっていた。これに対しキシリア・ザビ少将は、SフィールドへN第34MS部隊を差し向けた他、空母ドロスの同型艦ドロワも迎撃に当たらせたものの、ルザル艦隊のMS部隊は少しずつア・バオア・クーへと近付きつつあった。更に、この状況を加速する事態が発生する。総帥ギレン・ザビの死である。ギレンの死後、キシリア少将がア・バオア・クーの指揮権を掌握したが、指揮権が委譲されるまでの僅かな間に、各フィールドの連邦軍はア・バオア・クーへ肉迫していた。

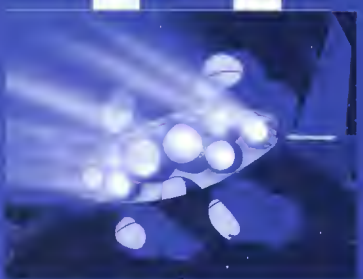
ア・バオア・クー戦：終結

死によ 的な混 上陸 連邦軍上陸を許してしまう また、ギレンの死は公式 戦 キシリア少将による暗殺を疑 、エキ ユ・ ス大佐 当時 が独自ノ判断で戦線を離脱する等、ジオン軍の防衛ラインは各所で破綻 つつあ た 結果 ジオン軍か首都を諦めてい ルトでも中核艦トロワが撃沈され 連邦のMS部隊が要塞上陸を果たす

ア・バオア・ク 内での白兵戦までも展開される状況を鑑みて キシリア サヒ少将は脱出を決意 脱出 30分後 降伏を余儀るか、キシ ア少将の乗艦は脱出時 撃沈され、少将自身も戦死 ア ＵＣ0079年12月31日12時15分 要塞内のこサイル工廠か爆発し ア・バオア・ク は完全に機能を停止 残 ジオン軍将兵もある者は脱出 まある者は連邦軍へと投降した 一年戦争最後の大規模戦闘となった ア バオア クー戦略戦争星 号作戦は終了した

同日18時、ジオン 共和国 は連邦政府に対 降伏を通知 数十億もの人命を奪い去った、地球圏規模の戦争は幕を下ろすことになった





ジオン共和国の成立

オ[illegible]戦艦が撃ち[illegible]れた[illegible]

[illegible]ある準備に取りかかっていた[illegible]ア・バオア・クー[illegible]、ムサイから和平交渉、ひいてはジオンの敗戦を予告された[illegible]ルシア[illegible]サイド3上層部の掌握と、終戦処理の準備を進めて[illegible]たしい[illegible]れは、敗戦によって過激な行動を取りかねないサビ派、特にギレン派を早い時期に抑束するためにも必要な措置でもあったろう

ドズルの死やア・バオア・クーでの戦力損失に代表される予想外の事態はあったが、ア・バオア・クーの陥落を知ったダルシアは、内閣の掌握し、共和制への移行を果たす[illegible]この間[illegible]詳しい経緯[illegible]不明[illegible]あるが、ア・バオア・クー陥落から6時間という極めて短い時間で国家体制を変化させ連邦政府に降伏を申し入れたと[illegible]事実には驚嘆せざるを得ない。ドズルの遺勅か公的に有効な命令をダル[illegible]か受け[illegible]た可能性が高い。ジオン共和国の初代首相となったダル[illegible]は、U.C.0[illegible]0年1月1日連邦との終戦協定にサインすることになる

なお、ジオン・ダイクン時代のサイト3も[illegible]オ[illegible]共和[illegible]呼[illegible]れるか当時は自らジオン共和国と名乗っていた訳[illegible]ない

終戦協定の締結

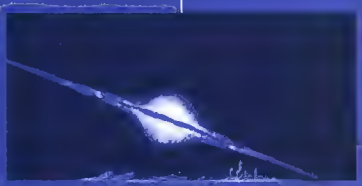
ア・バオア・クー陥落後、極めて短時間で地球連邦政府に降伏を申し入れたジオン共和国は、翌日のU.C.0080年1月1日には、月面都市グラナダで終戦協定を結んだ(共和国の降伏申し入れや、終戦協定締結の仲介を行なったのは中立コロニー・サイド8であった)。ここにジオン公国で「ジオン独立戦争」と呼ばれた、一年戦争は終戦を迎えた。

協定締結直後のエピソードとして、協定の内容と自らの仕事に満足した共和国首相ダルシアが、迎えの車を断わって市街への散歩に出かけたという話が知られている。これに関してのダルシアの言葉は知られていないが、実際、終戦協定の内容は敗戦国のジオン共和国としては、さほど悪いものではなかった。一年戦争は、それをほど長い戦争ではなかったが、地球環境に与えた影響や人的被害は甚大であり、その責任からジオン共和国は自治権の放棄を求められるかとも思われたが、共和国の自治権は認められた。また、戦後保証もコロニー再建作業程度だったようで、共和国にとっては致命傷とならなかった。勿論、連邦の監視や戦力の削減は行なわれたが、コロニーとしての立場は守られた。

戦争犯罪者への処置

一年戦争においてジオン公国軍は、コロニー落しやコロニーへの毒ガス注入等の数々の非人道的作戦を決行したため、責任者や実行者への軍事裁判は不可欠であった。だが、ここで問題となったのが、責任を負うべきデギン・ザビやギレン・ザビ等が死亡していたことだった。毒ガス作戦に至っては外人部隊（海兵隊）が勝手に実行したというのが公国時代からの見解で（実際には、実行した兵士は毒ガスだと知らされていなかった）、しかもその外人部隊は終戦時に行方不明となっている等、多くのケースで責任者どころか実行者すら捕捉できない状況に陥っていた。このため、実際に裁かれた者は比較的少数だったようである。

共和国の国民や政治家にとって都合がよかったのは、公国の中核を占めたザビ家がほぼ全滅していた上に、ア・バオア・クー戦後の混乱の中、多くの軍人が行方不明となっており、全責任を彼等に押し付けることが可能なことだった。連邦はザビ家の軍事独裁を批判していたこともあって、裁判対象を広げにくかったのかもしれない。



戦後の地球圏再建

[illegible]年戦争[illegible]開の戦[illegible]を死[illegible]の史上最大の戦乱であ[illegible]また 戦後の地球圏再建にとては有益なことだた 大幅人口が減[illegible]かため、民[illegible]に国す資源が少なくて済むからた これはコロ[illegible]の[illegible]建設が少な ても済むことを意味しており、地球の再建を優先 て進める[illegible]実にもなる 連邦政府がそこまで意[illegible]していたかは不明たか 壊滅的な被害を受[illegible]スペ スノイト と て面白い話でない これはU. 00[illegible]3 いう事件の原因でもある

[illegible]も戦後の[illegible]各は地球圏[illegible]再建が中核とな「おり それは意義のある [illegible]であ た。 C 082年5月[illegible]は 第1次コロニー再生計画が実行され 再建可能[illegible]ン ターかサイト4からサイド3へと移送されている 戦後処[illegible]の一環であろう 新規のコロ 一開発てなかた し、連邦政府[illegible]消きなかのかもしれないかスペ スノイトにと て[illegible]は 条[illegible]とも問題いない

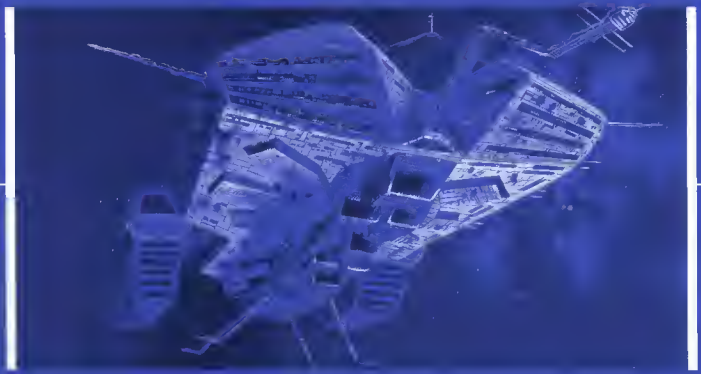
[illegible]の再建と共[illegible]年戦争て消耗した連邦家の復興それ[illegible]れ[illegible]なる

一年戦争後の地球連邦軍、ジオン公国軍

一年戦争後の地球連邦軍

一年戦争で勝利を収めた連邦軍であったが、戦後も大きな混乱を抱えていた。特に各勢力との[illegible]軍事抵抗力も行方不明になっているものが多く、その脅威は把握できていなかった。この辺りの事情が、[illegible]の最大の原因と反映されている。敵の総戦力が不明である以上、戦力の回復が急がれたのは不思議ではない。このため、連邦軍サイド[illegible]一年戦争[illegible]MS艦艇群の生産を進めるだけでなく、さすがにジム・シリーズの生産は、戦争中のような粗製濫造ではなく、高い精度で行われた。捕獲したジオン製MSすらも各部隊に配備して戦力の増強に努めた。ジオン残党の存在を口実に、軍部が権益を拡大しているという側面もあった。アフリカ大陸や宇宙のよこしジオン残党と思われる組織かゲリラ活動をくり返す事実があったため、連邦軍がこれらの脱得力があったのである。

このような連邦軍の再建が大々的に行なわれたのか。U.C 0081年10月1日に可決された「連邦軍再建計画」であるが、この「連邦軍再建計画」が新たな紛争と軍部の台頭を招いてしまう「連邦軍再建計画」の一環として進められた「ガンダム開発計画」では、数種類のガンダム・タイプMSが建造された。その中の核弾頭装備型ガンダムに目を付けたオデッサ残党=テロリストがそのガンダムを奪取するという事件が発生。世に言うテラス紛争の始まりであった。この紛争で連邦陸軍が大きなダメージを受けたのに一方、ロンド・ベル隊が台頭してきた。一部の軍人が左遷された。この事態を利用して、ジオン残党狩りを名目とした特務機関ティターンズ連邦軍内に成立。しかし、その実態は残党狩りに名を借りたスペースノイド弾圧組織であった。次第に行動をエスカレートさせていったティターンズはU.C 0085にはサイド1・30バンチに毒ガスを注入し、住民を虐殺するという30バンチ事件を引き起こすなど、事件の真実は隠蔽され公には激発性の伝染病であるとされた。この事件の真相を知った連邦軍の一部は、民間企業のバックアップを受けて、反地球連邦政府組織エゥーゴを結成。そしてU.C 0087年3月には、エゥーゴとティターンズによる軍事衝突が発生。地球圏は連邦系組織同士による内戦状態に入っていくことになる。これがグリプス戦役の発端であった。



戦後のジオン公国系組織

ジオン公国は一年戦争で敗北し、トップであったザビ家もほとんどが死亡した。しかし、軍の一部は連邦への投降をよしとせず、辺境の隕石基地や暗礁空域に身を隠し、ゲリラ活動を開始する者たちが存在した。代表的な例が、後にネオ・ジオンを名乗ることになるアクシズと、「デラーズ紛争」を引き起こしたデラーズ・フリートである。

アクシズは元々組織の名称ではなく、火星近くのアステロイド・ベルトにあった資源衛星である。戦後、そこに落ち延びたジオン残党を、便宜上アクシズと呼んでいるに過ぎない。アクシズが、他のジオン系組織と大きく異なっていたのは、ドズル・ザビ中将の遺児ミネバ・ラオ・ザビを擁した、ある意味正統なジオン公国の継承組織だったことである。このためか、ジオンの残党系組織では、最も大きな力を持っており、地球圏との往来も行なわれていた。衛星アクシズには、市街地や港湾施設だけでなく、独自のMSや艦船を建造可能な工場ブロックすら存在していた。このような施設群と地球圏からの距離を味方に戦力を整えたアクシズは、U.C.0087のグリプス戦役に参戦し、翌年にはネオ・ジオンを名乗り第一次ネオ・ジオン戦争を引き起こすことになる。初期の中心人物はマハラジャ・カーンという人物であったが、彼の死後には娘であるハマーン・カーンがミネバの摂政として全権を握った。一時はシャア・アズナブルも参加していたが、後に離脱している。

一方のデラーズ・フリートは、ギレン・ザビの親衛隊であったエギーユ・デラーズが率いた残党組織で、地球と月の間にある暗礁宙域に「茨の園」という拠点を築き、ゲリラ活動を行っていた。連邦軍に"ソロモンも悪夢"と恐れられたエースパイロット、アナベル・ガトーもデラーズ・フリートに参加した士官のひとりであった。デラーズ・フリートの総戦力は半個艦隊程度で、活動期間もU.C.0081~0083と比較的短いが、その活動が地球圏に与えた影響は極めて大きい。彼等が計画・実行した「星の屑作戦」は、スペースノイドの権益拡大を狙ったものだったようだが、結果的にスペースノイドを敵視する怪物組織、ティターンズが誕生するきっかけを作ってしまった。

これらの残党組織が残した爪痕は大きいが、地球連邦の前に消滅を余儀なくされ、公国系組織は絶えていくことになる。

Main Character
After Story
主要キャラクターのその後

AMURO RAY
アムロ・レイ

アムロ・レイの眠り〜その7年間

「致死して走狗煮らる」――旧世紀の諺にもあるように、戦場の英雄が平時においても讃えられるとは限らない。一年戦争という戦場が生み出した不世出の英雄、アムロ・レイが辿った運命もまた、その例に漏れないものであった。

一年戦争終結後、地球連邦軍の上層部はニュータイプの存在を危険視した。ジオニズムの根幹ともいえるその思想が持つ、政治的な求心力を怖れたのである。ニュータイプに関する情報はことごとく規制され、一年戦争中の検査でニュータイプであると判断されたアムロもまた、その対象となったのである。

アムロは一年戦争後、大尉の階級を与えられ、北米の連邦軍シャイアン基地に配属された。彼がそこでいかなる任務に就いていたかは、明らかになっていない。しかし、この基地は実質的には機能していない防空司令基地であったといわれている。彼に対するこの扱いは事実上の戦禁であり、その行動は地球連邦軍の厳しい監視の目に晒されていたという。豪華な邸宅を与えられ、何日からは悠悠自適の生活を送っているかのように見えたとしても、それは偽りの平穏であったといえるだろう。

だが、アムロがその状況に甘んじたのも、彼が一年戦争で受けた心の傷ゆえであったともいえよう。一年戦争末期、ジオン公国軍のニュータイプ、ララァ・スンとの交感の末に彼女を自ら死に追いやったことが、彼のトラウマとなっていたことは間違いないだろう。彼はシャイアンでの生活を「地獄」と表現したと伝えられている。それは、軍による軟禁という客観的な苦痛とともに、自らのトラウマから脱することができずに悶々とする自分自身への絶望感を示していたのではなかろうか。アムロ・レイがその戒めを乗り越え、再び戦う意志を取り戻すまで、実に7年という長い時間を要するのである。

アムロとシャアの共闘、そして決着

U.C.0087年に勃発したグリプス戦役の最中、アムロは反ティターンズの運動に参加し、パイロットとして戦線に復帰することとなった。彼が再起を成し遂げた背景には、クワトロ・バジーナと名を変えて反ティターンズの急先鋒として戦うシャア・アズナブルの存在があったといえよう。敵味方として同じ時間を共有し、ララァ・スンという共通のトラウマを抱えていたシャアは、アムロの復活を望んでいたひとりでもあった。

しかし、U.C.0093年の第2次ネオ・ジオン戦争では、アムロは地球連邦軍の外郭部隊"ロンド・ベル隊"の一員として、ネオ・ジオンの総帥として決起したシャアと再び対峙した。グリプス戦役では共に戦ったふたりが、またしても敵味方に分かれて戦ったのである。この争乱で、アムロはシャアとともに行方不明となった。自らの行いによって「人の革新」の実現を目指したシャアとは対照的に、アムロはパイロットとしての本分を貫き通した。「人の革新」が必然として到来する希望を信じた彼らしい生き方だったといえよう。

地球連邦軍を代表する名艦長、ブライト・ノアの不遇と至福

一年戦争を通じて(WB)隊の指揮を執り、同部隊が多大な戦果を挙げる一因となったブライト・ノア。"ニュータイプ部隊"として喧伝され、実際にその資質を疑われた(WB)隊だったが、幸か不幸かブライトはニュータイプとしての素養を見出されることはなかった。それ故、彼は職業軍人としての正当な道を絶たれることなく、一年戦争終結後も宇宙へ出ることを許された。宇宙での生活か人類のニュータイプへの開花を促すもの、という一般的なニュータイプ思想の解釈が、戦後の連邦軍にも浸透していたことの表れといえるだろう(アムロ・レイが地球上に戦慕されていたことからもそれが窺える)。

しかし、(WB)隊を率いた艦長という功績がありながら、戦後のブライトに対する扱いはそれに比するものではなかったといえる。彼はU.C.00B7年のグリプス戦役の時点で中佐に昇進しているが、実際の任務はシャトル"テンプテーション"の艦長という閑職であった。一説にはこの処遇は、一年戦争時に(WB)隊がレビル将軍の庇護を受けていたことが、ニュータイプを駆る戦後の連邦軍主流派に睨まれたためともいわれている。

ブライトは、軍人としては決して恵まれた戦後を送ったとはいえなかったが、プライベートでは幸福な家庭を築いたといえるだろう。彼は戦争終結後、(WB)の操舵手だったミライ・ヤシマと結婚、一男一女をもうけた。夫妻の信頼は非常に強く、離れて暮らしながらも互いの身を案じていたという。ともに苦難をくぐり抜けた経験が、ふたりの絆をより強いものにしたであろうことは、想像に難くない。

ニュータイプたちの道標となったブライトの戦歴

一年戦争終結後、閑職に回されていたブライトは、U.C.0087年のグリプス戦役においてエゥーゴに参加。強襲用宇宙巡洋艦"アーガマ"の艦長に迎えられて反ティターンズの中心となって戦った(この時点で彼は大佐に昇進している)。続いて勃発した第1次ネオ・ジオン戦争でもエゥーゴに籍を置き、その勝利に大きく貢献した。同戦役で彼が示した指揮官としての資質は一年戦争のものに劣らぬものであったといえよう。U.C.0090年代に入って創設された連邦軍の外郭部隊"ロンド・ベル隊"には、旗艦"ラー・カイラム"の艦長として参加、アムロとともに第2次ネオ・ジオン戦争でシャアと対決することとなった。

ブライトはどの戦役においても、つねに時代を代表するニュータイプとともに在った。一年戦争のアムロに始まり、グリプス戦役におけるカミーユ・ビダン、第1次ネオ・ジオン戦争におけるジュドー・アーシタと、彼が指揮する部隊には必ず若きニュータイプの姿があったのである。前述した通り、ブライト自身はニュータイプの素質を持っていなかったといわれている。それ故に、オールドタイプの視点からニュータイプたちの有り様を客観的に観察し、彼らに深く接したことで、その指揮官たり得たのかもしれない。

BRIGHT NOAH

Main Character *After Story*

時代に翻弄された"ニュータイプ部隊"の戦後

地球連邦軍のニュータイプ部隊と称された〈WB〉隊。現在では多くの記録や証言から、その詳細が人々の耳目に及ぶところとなっている。しかし、一年戦争後の彼らの処遇については、あまり知られていない。〈WB〉隊の主なクルーは、ア・バオア・クー戦で撃沈された〈WB〉から脱出されたことか明らかになっている。か、アムロ・レイやブライト・ノアなどの一部を除いたクルーたちの、その後の消息を知る者は多くはないだろう。

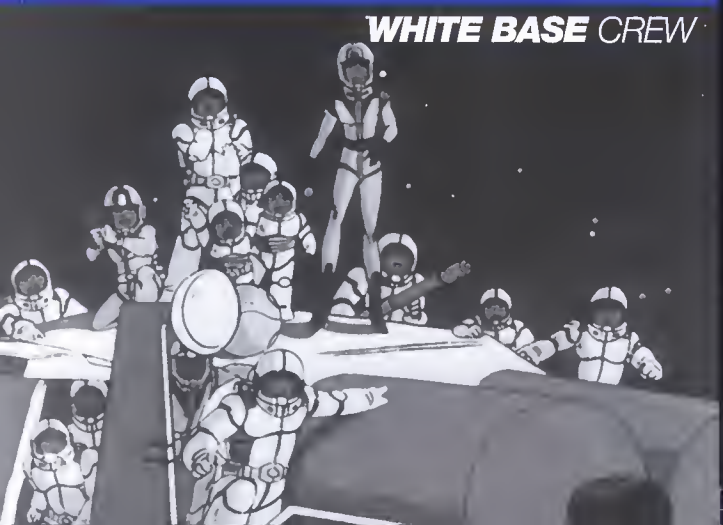
彼らの一部は、元々がサイド7からの避難民であった。戦時特例的に軍属になったとはいえ、戦後も軍に留まるという選択肢を選んだ者は多くなかったのであろう。ニュータイプとして地球連邦軍の監視下に置かれた者を除いては、ほとんどが軍から退いたと考えられる。地球連邦軍からすれば、〈WB〉隊の存在意義は戦時においてのみ有用であり、平時にはニュータイプの疑いかある彼らは危険視すべき存在であったといえよう。そうした点から考えれば、彼らの戦功がいかに多大なものだったといえど、重用されることかなかったのは容易に想像かつくのである。そのことは、ブライトのような、元々〈WB〉に乗艦していた士官候補生に対するその後の措置を見ても明らかといえる。

戦いの舞台から降りたセイラ・マスの想い

セイラ・マス(本名アルテイシア・ソム・ダイクン)にとっての一年戦争は、兄キャスバル・レム・ダイクンとの決別とともに幕を閉じた。彼女の戦う意味は兄を止めることにあり、それが叶わなかった上で彼女が戦いを続ける必要性はなかったのであろう。

セイラは一年戦争終結後、軍を退役して長らく行方をくらましたといわれている。戦時中、地球連邦軍は彼女をニュータイプと判断していた節かあった。同様にニュータイプと断じられたアムロが軟禁状態に置かれたのに対して、彼女の行動か自由になっていた点について、いかなる事情があったのかは明らかではない。いずれにせよ、彼女は二度と戦いに身を投じることはなかったという。一説には、南仏に屋を構え、マス家の資産を継いで投資家として生計を立てたともいわれている。

取治と戦いから己を切り離し、決して表舞台に立つことなく暮らしていたセイラだか、U.C.0088年の第1次ネオ・ジオン戦争末期、エゥーゴに属していたブライトと再会している。その際には、一時はエゥーゴに身を投じながらもグリプス戦役の終焉とともに再び姿を消した兄の動向を気にかけていたといわれている。しかし、兄が父の理想を歪めて受け止めているのではないかという彼女の懸念は、皮肉にもその5年後に現実のものとなってしまう。シャア・アズナブルとしてジオン・ダイクンの遺志を継いだ兄の姿を、彼女はいかなる心情で眺めたのであろうか。それは、彼女自身にしかわからないことである。



ジャーナリストとしてのカイ・シデン、その信念と決意

カイ・シデンは一年戦争中、〈WB〉隊の中にあっても地球連邦軍に対する不信感を露にすることが多かった。軍の組織に否応なく組み込まれてしまう自分に違和感を感じてのことであったといわれているが、そうした気質を持つ彼が一年戦争終結後も軍に留まる必然はなかったといえよう。戦後、彼は軍を退役し、フリージャーナリストとして活動したと伝えられている。しかし、ニュータイプの素養を疑われていた彼は隊解後も軍に行動を制約され、宇宙へ上がることを禁じられていたという。

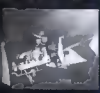
ジャーナリストとなったカイは、U.C.00B0年代後半におけるティターンズの勢力拡大に危機感を抱き、独自にこれの調査を行っていたという記録が残っている。彼が集めた情報は、かつての戦友であるハヤト・コバヤシを通じてエゥーゴの同盟組織、カラバに提供され、反ティターンズ運動の一助となっていたと考えられる。だが、彼はその活動の中で地球連邦軍に身柄を拘束されることもあったという。さらに、カイはクワトロ・バジーナを名乗るシャアの正体を看破し、ハヤト・コバヤシに宛てた手紙の中でパイロットの立場に甘んじる彼の行動を糾弾したといわれいてる。そこには、「敢闘者」とまで言われた少年の面影はもはやなく、真実を追究するジャーナリストの信念が窺えるのである。

カラバの名指揮官へと成長したハヤト・コバヤシ

〈WB〉隊のクルーの中で、一年戦争終結後に人間的に大きく成長した人物を問われた場合、ハヤト・コバヤシの名を挙げる者は多いだろう。戦時中の彼は、アムロや他のクルーに対する競争心から、激しい焦りに駆られることもあった。しかし、その経験と戦後の時の流れが、彼の成長を促すこととなった。

戦後も軍に留まったハヤトは、ケネディ宇宙基地に供設された戦争博物館の館長という補務を与えられた。この処遇もアムロやブライト同様、元〈WB〉隊のクルーを隔絶に追いやるものであったといえる。彼はこの組にありながら、カイと同じくティターンズの専横に危険を感じ、カラバの活動に身を投じていった。グリプス戦役では、ガルダ級超大型補送艦"アウドムラ"の艦長として、地上における反ティターンズ運動の中心的存在として活躍することとなった。その後の第1次ネオ・ジオン戦争でもカラバの実働部隊指揮官として尽力したが、ダブリンへのコロニー落としの際に敵と交戦、戦死している。カラバに参加してからのハヤトは、指揮官としての才能と度量を発揮していたといわれている。一年戦争時の彼の姿から考えれば、その成長は賞嘆に値するものといえよう。

ハヤトの成長を促した一因として、家庭をもったことが挙げられよう。彼は戦後、〈WB〉でオペレーターを務めていたフラウ・ボウと結婚し、同じく〈WB〉に乗艦していた避難民のカツ・ハウィン、レツ・コファン、キッカ・キタモトを養子に迎えている。守るべき家族を得たことが、彼の人間的な成熟を助長したことは想像に難くない。



CHAR AZNABLE

シャア・アズナブル

理想の実現を模索したシャア・アズナブルの雌伏

デギン・ザビによる父ジオン・ダイクンの謀殺に端を発した、キャスバル・レム・ダイクンの復讐劇は、一年戦争の半ばですでに変質していたといえる。彼はキャスバルではなくシャア・アズナブルとして、「人の革新」を速やかに到来させるべく、その障害となるザビ家のような体制の打倒を目指したのである。グリプス戦役以降の彼の行動は、すべてがその目的に帰結していたともいえるだろう。だが、彼が再び行動を起こすまでの数年間は、いわば「降魔」とも呼べる静かな時間であった。

一年戦争の終焉とともにザビ家の支配体制は崩壊し、ミネバ・ザビをはじめとする公国軍残党は地球圏を離脱して小惑星帯のアクシズに身を寄せた。シャアは彼らに同行し、アクシズの運営に力を貸したといわれている。一年戦争でエース・パイロットとして名を馳せた彼の名声は、アクシズに身を寄せた将兵たちの信望を得るに十分なものであった。アクシズの初期の指導者であったマハラジャ・カーンの死後、若干16歳のハマーン・カーンがその後任に就いたのも、シャアの推挙に拠るところが大きかったといわれている。

しかし、アクシズは地球圏帰還を目指して軍事路線を歩み始め、その中でシャアはアクシズを離脱して地球圏へと向かった。名目上は地球圏の偵察という形をとっていたが、これは事実上アクシズからの出奔であったといえる。U.C.0084年9月21日、地球連邦軍大尉"クワトロ・バジーナ"の革新を手に入れたシャアは、エゥーゴに参加して反ティターンズ運動に身を投じていった。このグリプス戦役が、シャア・アズナブルの名を再び地球圏に知らしめることとなるのである。

「シャアの叛乱」の土壌となった体制への絶望

シャアは当初、エゥーゴにおいてパイロットの立場に徹していた。しかし、U.C.0087年11月16日の連邦議会において、ティターンズを制圧するために自らがシャア・アズナブルでありジオン・ダイクンの遺児でもあることを公表、エゥーゴの中心となった。だが、彼にとってのグリプス戦役は、結果的に体制に対する絶望感を深める結果を導いた。グリプス戦役で彼が目の当たりにした実情は、彼の目指す「人の革新」を持つ間に、人類が地球を食い潰してしまうのではないかという危機感を抱かせたのである。この戦役の最終局面で姿を消した彼は、その6年後のU.C.0093年、ネオ・ジオン総帥として地球連邦政府に宣戦を布告し、第2次ネオ・ジオン戦争（シャアの叛乱）を引き起こす。彼はそこで、地表へ隕石を落下させて地球を寒冷化（「核の冬」と呼ばれる現象）させようと画策した。人類を強制的に宇宙に上げることで、ニュータイプへの覚醒を促そうとしたのである。そしてその争乱の最中、彼は終生のライバルであるアムロと戦い、行方不明となった。彼はそこで歴史という軍台から退場したが、彼が人々に提示した「ニュータイプへの革新」という命題は、これ以降も人類全体に模索したものとなっていったといえるだろう。

公国軍残党を纏め上げたエギーユ・デラーズの手腕

ア・バオア・クーの敗北を受け、生き残った公国軍の将兵たちは大半がミネバ・ザビを掲してアクシズに落ち延びた。しかし、一部の者たちは地球圏に留まり、地球連邦政府に対する反抗を企てた。エギーユ・デラーズを首魁とする“デラーズ・フリート”である。

ア・バオア・クー攻防戦の最中、ギレン・ザビ総帥の戦死とそれに続くキシリア・ザビ少将の指揮指導権の報を受けたデラーズは、キシリアによるギレン暗殺を察知。麾下の艦隊を率い、攻防戦の決着が着く前にア・バオア・クーから撤退した。

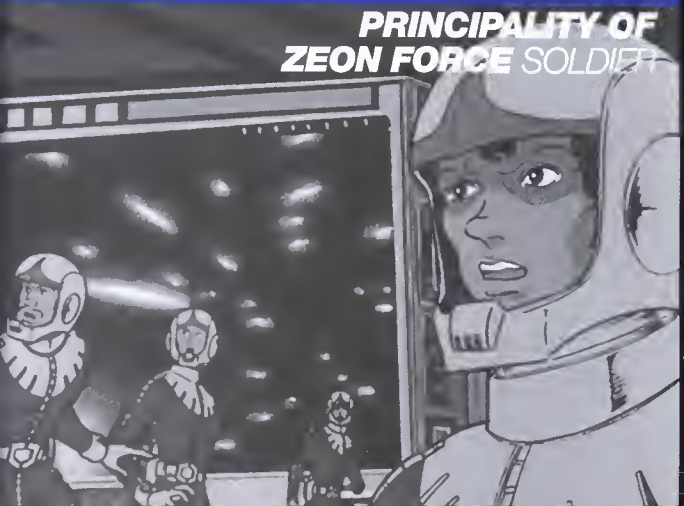
デラーズは一年戦争終結後、アクシズ行きを拒んだ、ないしは合流できなかった者たちを糾合して艦隊を再編。U.C.0080年3月、サイド5の暗礁宙域に無償基地“茨の園”の設営を開始した。地球圏に留まった公国軍残党の中にあって、デラーズの求心力は大きかったといえよう。彼の下にはその戦力となる兵士たちが集い、戦後の公国軍残党による最大の作戦行動の土壌となっていった。それと同時に、彼はアクシズに通じた勢力とも通じ、作戦に移った際の共闘関係を築いていた。この時点で彼は、自らの戦術構想を実現するための要素を着実に満たしていったといえるだろう。デラーズの描いた反攻の草図は、U.C.0083年の“星の屑作戦”において結実する。しかし、彼自身はその成就を直前にして凶弾に倒れ、作戦の完遂を見ることなくこの世を去ることとなった。

再起の念を抱いて月に身を委ねたアナベル・ガトー

アナベル・ガトーは、エギーユ・デラーズと並んで戦後の地球圏に強い印象を与えた公国軍軍人のひとりであろう。公国の再興という揺るぎない信念に支えられた彼の生き様は、独立の志を抱いて戦った公国軍の武人を象徴するものだったといえよう。

ア・バオア・クー攻防戦の最中、デラーズに従い戦場から離脱したガトーは、アクシズへ向かわずにそのままデラーズ・フリートの一員となった。デラーズが“茨の園”の設営を進める一方で、ガトーは月面都市フォン・ブラウンに潜伏していたといわれている。そこで彼が何を行っていたのかは定かではないが、アナハイム・エレクトロニクス社のエンジニア、ニナ・パープルトンと親密な関係になっていたことは知られている(彼女は「ガンダム開発計画」にも深く関わった人物で、ある意味では“星の屑作戦”の生き証人ともいえよう)。彼はデラーズとの対話の中で「自分には月の重力は合いかねる」と発言したといわれている。いつ来るとも知れない再起の狼煙を待ちながら、平穏な時の中に身を埋もれされることは、彼のような戦士には耐え難いことだったのかもしれない。

1年半にも渡るフォン・ブラウンでの生活を経て、ガトーはゲリラ活動を開始したデラーズ・フリートに合流した。U.C.0081年9月17日のことである。本来の居場所へと戻った彼は、U.C.0083年に立案、遂行された“星の屑作戦”の中心人物として、戦いへと身を投じていく。3年の時を経て、“ソロモンの悪夢”が再び連邦軍を震撼させたのである。



Universal Century Word Dictionary
宇宙世紀用語辞典～ア・バオア・クー編～

ここでは、一年戦争、特にア・バオア・クー戦を
理解するための主要な用語・人名をまとめて掲載。
シリーズ中、詳しく紹介できなかった用語に関してはここで補完する。
【 】内は詳細を記した「ガンダムオペレーション」参照巻数を表す。

あ

アナベル・ガトー
一年戦争末期、ドズル・ザビ中将麾下の宇宙攻撃軍に所属していたエースパイロット。ソロモン海戦での活躍が有名で、"ソロモンの悪夢"と連邦軍兵士から恐れられた。一年戦争後、デラーズ・フリートの一員として、「星の屑作戦」に参加している。[6]

ア・バオア・クー
ジオン公国軍の宇宙要塞。小惑星帯から運ばれた資源採掘用の小惑星を要塞化したもの。ここでの戦いが一年戦争最後の攻防戦となった。[1~6]

アムロ・レイ
地球連邦軍、ホワイトベース隊に所属していたエースパイロット。一年戦争、最高のニュータイプと言われ、RX-78ガンダムを駆り、数多くの戦果を上げた。[5,6]

エギーユ・デラーズ
ジオン公国軍将官。大佐としてア・バオア・クーにあったが、ギレン・ザビ総帥の戦死を知り、いち早く戦線を離脱した。一年戦争後、地球圏の公国軍残党を集め、デラーズ・フリートを組織する。[5]

か

カイ・シデン
地球連邦軍、ホワイトベース隊所属のパイロット。主にガンキャノンに搭乗し、戦果を上げた。[5]

ガトル
ジオン公国軍の宇宙戦闘爆撃機。一年戦争以前より配備されていた兵器で、ア・バオア・クー戦ではめざましい戦果を上げることはなかった。[3,5]

ガンキャノン(RX-77)
地球連邦軍の中距離支援用モビルスーツ。RX計画で開発されたモビルスーツのひとつ。[2,3,4]

ガンダム(RX-78)
地球連邦軍の試作型モビルスーツ。教育型コンピューターやコア・ブロック・システムなど、一年戦争当時の最先端技術を搭載した機体で、絶大な戦果を上げた。[2,4]

キシリア・ザビ
ジオン公国軍少将で、デギン・ザビ公王の長女。ア・バオア・クー戦中に、兄であるギレン・ザビ総帥を殺害、その指揮権を手中に収める。ア・バオア・クー脱出時に戦死している。[4]

ギレン・ザビ
ジオン公国軍総帥で、デギン・ザビ公王の長男。公国の実質的指導者であった。ア・バオア・クー戦中、キシリア・ザビに殺害される。[4]

グラナダ
月面の地球から見て裏側に位置する都市。一年戦争開始と同時にジオン軍に占領され、軍事基地となる。以降、モビルスーツの生産、実験を行う施設が建設され、キシリア・ザビ少将麾下の突撃宇宙軍司令部が置かれることとなった。一年戦争の終戦協定はここで結ばれている。

グワジン級大型戦艦
ジオン公国軍の大型戦艦。一年戦争当時において最高峰の性能を有していたといわれる。デギン・ザビ公王は同型の<グレート・デギン>に乗艦していた。

ゲルググ(MS-14)
ジオン公国軍量産型モビルスーツ。公国軍のモビルスーツで初めてビーム・ライフルを装備した機体[3,4,5]

コア・ファイター(FF-X7)
地球連邦軍のRXシリーズ(ガンダム、ガンキャノン、ガンタンク)のコクピット・モジュールとして使用される戦闘機。[2]

コア・ブースター(FF-X7Bst)
コア・ファイターにブースター兼武装ユニットを装着したもの。コア・ブースターの代わりにGアーマーが配備されたという説もある。[2,4]

さ

サイコミュ
サイコ・コミュニケーターの略で、脳波電動システムともいう。ニュータイプが発する「感応波」を受信し、機械語に翻訳するインターフェイスである。[5]

ザクⅠ(MS-05)
ジオン公国軍の量初期の量産型モビルスーツ。実戦に使われた史上初のモビルスーツ。旧型ながら、ア・バオア・クー戦にも投入されている。[3]

ザクⅡ(MS-06)
ジオン公国軍の初期の量産型モビルスーツ。公国軍の象徴とも言える機体。さまざまなバリエーションが存在する。[3,4]

サラミス級宇宙巡洋艦
地球連邦軍の主力宇宙戦艦。連邦軍の「70年代軍備増強計画」で就役した艦船で、モビルスーツ搭載能力は無かった。[2]

ザンジバル級機動巡洋艦
ジオン公国軍の軍用艦。公国軍で、一年戦争時に唯一、大気圏の突入を可能とした戦艦であった。[3]

ジオング(MSN-02)
ジオン公国軍試作型ニュータイプ用モビルスーツ。有線式のサイコミュ・システムを搭載し、オールレンジ攻撃を可能としていた。[3,4]

ジオン・ダイクン
宇宙世紀を代表する政治思想家で、ジオン共和国の初代首相。彼は地球連邦の政治に不満を持ち、サイド国家主義(コントリズム)や、人類はすべて宇宙に居住するべきであるとする考え(エレズム)を主張した。後に彼は暗殺され、ジオン共和国はジオン公国となり、ザビ家一党による独裁体制が行われることになる。

ジム(RGM-79)
地球連邦軍の量産型モビルスーツ。一年戦争末期に大量投入され、連邦軍の主力モビルスーツとして活躍した。[2,4]

シャア・アズナブル
ジオン公国軍のエースパイロット。"赤い彗星"として連邦軍兵士に恐れられた。本名はキャスバル・レム・ダイクン。ジオン・ダイクンの長男である。[4]

スペースコロニー
宇宙に浮かぶ人工の宇宙都市。円筒形をしており、これが回転することにより、遠心力を与え、疑似重力を作り出す。地球と月からの引力が均衡する場所(=ラグランジュポイント)に数十基が一まとまりとなっており、そのまとまりを「サイド」と呼ぶ。サイドは全部で7つ存在し、ひとつひとつのコロニーは「バンチ」と呼称されている。

セイラ・マス
地球連邦軍、ホワイトベース隊所属のパイロット。実はジオン・ダイクンの娘で、本名はアルテイシア・ソム・ダイクンという。[5]

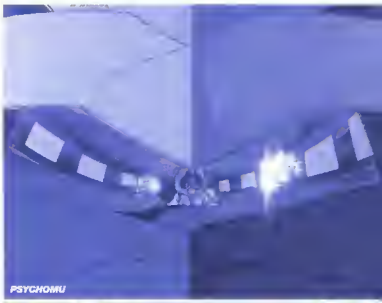
ソーラ・レイ・システム
ジオン公国軍が使用した巨大なレーザー砲。スペース・コロニー1基をレーザー発生装置に改造し、直径6.4kmのレーザー光を照射する。実際には0079年12月30日にグルドル照準に向け発射され、和平交渉をすべく接触していたデギン・ザビとレビル将軍の艦隊を消滅させた。

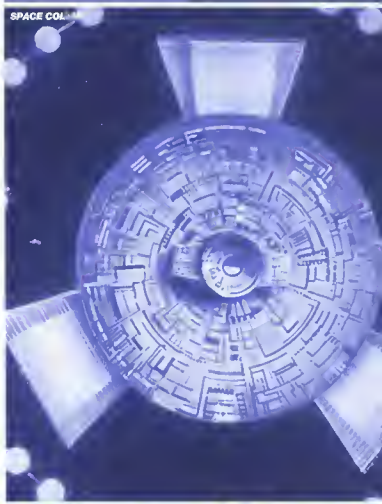
た

チベ級高速重巡洋艦
ジオン公国軍の戦闘艦。公国軍戦艦としては初期に開発されたものであるが、その機動性と重装甲から一年戦争を通して運用された。[3]

デギン・ザビ
ジオン公国の公王。公王ではあったが、実際の権力はギレン・ザビが握っていた。ギレンの独走を止めるため地球連邦に和平交渉を行うべくレビル将軍と接触を図ったが、ソーラ・レイの照射により死亡している。

ドロス級大型輸送空母
ジオン公国軍の超大型空母。一年戦争最大の軍用艦であり、182機のモビルスーツを搭載することが可能であった。

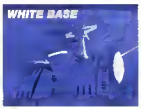




ZEONO

Universal Century *Word Dictionary*

宇宙世紀用語辞典～ア・バオア・クー編～



な

ニュータイプ
宇宙という新しい生活環境を手に入れることで、潜在的に秘めていた能力を開花させ、高い洞察力と状況認識力を得た人類のこと。[5]

は

バソク級輸送艦
ジオン公国軍の輸送艦。モビルスーツを多数輸送することが可能であったが、戦闘母艦としての機能は持っていなかった。

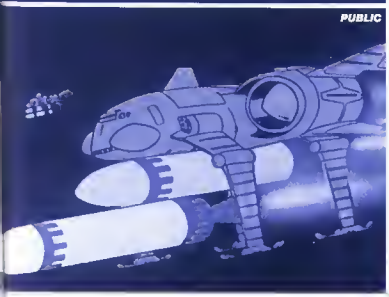
バブリク
地球連邦軍の突撃艇。大型ミサイルによる一撃離脱戦法を得意とする。[2,3]

ハヤト・コバヤシ
地球連邦軍。ホワイトベース隊所属のパイロット。ガンタンク、ガンキャノンに搭乗し、戦果を上げた。[4]

ビグロ(MA-05)
ジオン公国軍モビルアーマー。ア・バオア・クー戦には量産された十数機が投入されている。[3]

ブライト・ノア
地球連邦軍、ホワイトベース隊艦長。強い責任感と的確な状況判断力でホワイトベース隊を支えた人物である。[4]

ボール(RB-79)
地球連邦軍の宇宙戦用武装ポッド。モビルスーツに分類されることも多い。主にジムの支援用に運用された。[2,4]



星一号作戦
宇宙要塞ソロモンを攻略した地球連邦軍が、ジオン公国軍の最終防衛ライン、ア・バオア・クーを抜き、公国本国へ進攻することを目的とし、0079年12月30日に発令した作戦。[1]

ホワイトベース級強襲揚陸艦
「V作戦」の課程で量産された戦艦であり、地球連邦軍で初めてモビルスーツの運用を前提に設計されている。アムロ・レイらを擁するホワイトベース隊は一年戦争において絶大な戦果を残した。[2]

ま

マゼラン級宇宙戦艦
地球連邦軍の主力戦艦。就役した当時は最高級の能力を持っていたが、モビルスーツの開発により、その真価を発揮することができなかった。[2]

ミノフスキー粒子
宇宙世紀0089年、トレノフ・ミノフスキーによって実存が実証された粒子。核融合炉、ビーム砲(メガ粒子砲)などの技術に応用されている。最大の特徴は、この粒子を一定レベル以上散布したエリアでは、電波などが使用できなくなる点である。これにより、レーダー類の使用、長距離ミサイルなどの無誘誘導ができなくなり、モビルスーツという新兵器が生まれる原因となった。

ムサイ級軽巡洋艦
ジオン公国軍を代表する宇宙艦艇のひとつ。連邦、ジオン両軍を通じて初めてモビルスーツの運用を前提に設計された艦艇でもある。[3]

メガ粒子砲
粒子ビーム兵器の一種。ミノフスキー物理学の応用技術のひとつとして開発された。主に戦艦に装備されたが、一年戦争末期には、モビルアーマーやジオングなどの大型モビルスーツにも内蔵された。

モビルアーマー
Mobile A.R.M.O.U.R(All Range Maneuverability Offence Utility Reinforcement)の略で、全領域汎用支援火器の意。非人間型の機動兵器全般を指す。[3]

モビルスーツ
Mobile S.U.I.T(Space Utility Instruments Tactical)の略で、戦術汎用宇宙機器の意。人間型の機動兵器のこと。[2,3,4]

ら

リック・ドム(MS-09R)
ジオン公国軍の量産型モビルスーツ。地上用のモビルスーツ、ドムを宇宙戦用に改修したもの。[3,4]

レビル将軍
地球連邦軍の実質的な最高指揮官。ルウム戦役において捕虜になった経験をもとに、V作戦を発動。連邦軍を勝利に導いた立役者である。ソーラ・レイの照射により戦死している。[4]

英数

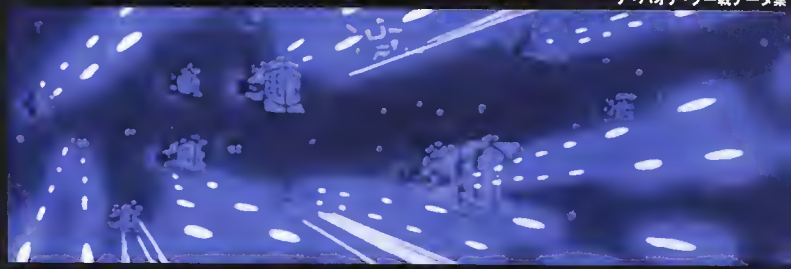
AMBACシステム
正しくは「能動的質量移動による自動姿勢制御システム」(Active Mass Balance Auto Control System)。宇宙空間でモビルスーツが行う姿勢制御方法で、腕や脚を動かすことで生み出される反作用を利用し、機体姿勢を変更させる。これにより、通常の宇宙戦闘機のようなバーニア・ロケットに頼る姿勢制御に比べ、推進剤の消費を押さえることが可能になった。

RX計画
ジオン軍のモビルスーツに対抗する兵器を開発するために、地球連邦軍が0078年に発動させた計画。1年以上に渡り、モビルスーツの基礎研究を押し進めた。[2]

V作戦
モビルスーツの開発、量産と、その母艦となる強襲揚陸艦の開発、量造を目的とした地球連邦軍の極秘計画。RX計画での研究をもとに、ガンダムをはじめとするRXシリーズのモビルスーツとホワイトベース級強襲揚陸艦の開発に成功した。[2]

A BAOA QU BATTLE DATA

ア・バオア・クー戦データ集



TIMETABLE OF **A BAOA QU BATTLE**

ア・バオア・クー戦 戦闘推移表

12.29		「星一号作戦」発令
12.30	08:20	グレート・デギン、レーザー通信により、レビル艦隊へ接触。
	09:00	グレート・デギン、連邦軍に投降、レビル将軍搭乗艦フェーベに接舷。
	09:05	ジオン公国軍、ゲルドルバ照準に向け、ソーラ・レイを発射。地球連邦軍艦隊の1／3が消失。デギン・ザビ、レビル将軍死亡。
12.31	00:00	地球連邦軍首脳部、「星一号作戦」の強行を決定。
	05:00	地球連邦軍残存艦隊の再編が完了。
	08:10	地球連邦軍、突撃艇による第1波攻撃を開始。ア・バオア・クー戦開戦。
	08:40	地球連邦軍、モビルスーツ部隊を投入。
	09:25	ア・バオア・クー司令室において、キシリア・ザビがギレン・ザビを射殺。ア・バオア・クーの指揮権がキシリア・ザビへ移行。
	09:40	ジオン公国軍大型空母ドロス撃沈。
	10:10	ジオン公国軍大型空母ドロワ撃沈。
	12:05	キシリア・ザビ、ア・バオア・クーから脱出を計るも、乗艦していたザンジバルとともに撃沈。
	12:15	ア・バオア・クー中央部に位置するミサイル工場で火災。一部区画を除き停電。
	18:00	ジオン公国、共和制へ移行。地球連邦政府へサイド6を通じ、終戦協定締結を申し入れる。
01.01	15:00	月面都市グラナダにおいて、地球連邦政府とジオン共和国との間に終戦協定が結ばれる。一年戦争終結。

E.F.S.F.

ア・バオア・クー戦、地球連邦軍投入兵器データ一覧

艦船

等級、種別	全長	全幅	全高	全重量	主推進機関	主装備	搭載機数
マゼラン級宇宙戦艦	265m	67.1m	80.2m	2万2000t	熱核ロケット・エンジン×4	2連装メガ粒子砲×7、2連装機銃×14、ミサイル・ランチャー	初期型：なし 後期型：MS×4（異説0、3、6、8）
サラミス級宇宙巡洋艦	228m（異説268m）	68.3m	61.3m	2万2000t	熱核ロケット・エンジン×4（初期型をプラズマ推進エンジンとする異説あり）	単装メガ粒子砲×6、2連装機銃×6、6連装ミサイルランチャー×2	初期型：なし 後期型：MS×4（異説6、9、12、15）
ホワイトベース級強襲揚陸艦	262m（異説250m）	202.5m（異説として翼を含み108m、110.8m）	93m（異説97m）	3万2000t（異説6万8000t）	4連装熱核ハイブリッド・エンジン・システム×2 ミノフスキー・クラフト・システム（出力／55万馬力 最高速度／マッハ12）	880mm2連装主砲（異説580m2連装主砲） 2連装メガ粒子砲×2 前部ミサイル発射装置×24（異説580m2連装主砲） 後部ミサイル発射装置×6（異説、小型ミサイル×36）	MS×3（異説6、9、12、15） ガンペリー×1、 コア・ファイター×6、 コア・ブースター×2（異説、Gファイター×2）

モビルスーツ

名称/型式番号	開発工廠	全高	本体重量	ジェネレーター出力	スラスター推力	装甲材質	武装
ガンダム/RX-78	ジャブロー	18.0m	43.4t	1380kW	5万5500kg	ルナ・チタニウム	頭部バルカン砲×2、ビーム・サーベル×2、ビーム・ジャベリン×2、専用ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ、ガンダム・シールド、ガンダム・ハンマー、ハイパー・ハンマー
ガンキャノン/RX-77	ジャブロー	17.5m	51.0t	1380kW	5万1800kg	ルナ・チタニウム	頭部バルカン砲×2、240mmキャノン砲×2、3連装ミサイル・ポッド、専用ビーム・ライフル、手榴弾
ジム/RGM-79	ジャブロー	17.5m	41.2t	1250kW	5万5500kg	チタン系合金	頭部バルカン砲×2、ビーム・サーベル、ビーム・スプレーガン、ガンダム・シールド、ガンダム用ビーム・ライフル、ハイパー・バズーカ
ボール/RB-79	ルナツー	12.8m	17.2t	400kW	———	———	180mmキャノン砲

戦闘機、戦闘艇

名称/型式番号	全長	全幅	全高	全重量	最高速度	機体材質	主装備
コア・ブースター FF-X78st	13.8m	12.6m	6.75m（着陸足含む）	18.3t	マッハ5.38	ユニバーサル・ジュラルミン、ハイパー・チタニウム、ルナ・チタニウム他	メガ粒子砲×2、多弾頭弾×2、ミサイル×4、30mm2連装バルカン砲×2
パブリク	———	———	———	———	———	———	———
スペース・ランチ	———	———	———	———	———	———	———

艦船

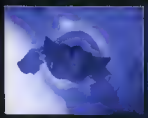
等級、種別	全長	全幅	全高	全重量	主推進機関	主装備	搭載機数
ムサイ級軽巡洋艦	234m	――	――	1万3000t	熱核ロケット・エンジン×2	2連装メガ粒子砲×3 (一年戦争後期にはメガ粒子砲が2門のタイプも存在) 大型ミサイル・ランチャー×2、小型ミサイル・ランチャー×10	MS×6[ムサイに4、コムサイに2] (異説MS×4~8、ムサイに6)
グワジン級大型戦艦	294m	214.6m	67.6m	3万5000t	熱核ロケット・エンジン×8	2連装メガ粒子砲×3、2連装機銃×10	MS×10(異説20、24)
グワジン級大型戦艦[グワデン]	440m	320m	103m	10万8100t	熱核ロケット・エンジン	2連装メガ粒子砲×3、2連装メガ粒子副砲×10、155mm連装機関砲×多数	――
ザンジバル級機動巡洋艦	255m	221.8m	70.5m	2万2000t (異説2万4000t)	熱核ハイブリッド・エンジン×4	2連装メガ粒子砲×8、2連装機銃×2	Jタイプ・ミサイル×2　MS×3 (異説6、9、12、16十MA×2)
ドロス級大型輸送空母	495m	351.5m	123.7m	14万4000t	熱核ロケット・エンジン×5	2連装主砲×2、2連装機関砲×5、固定メガ粒子砲×4	MS×182 (異説100、100以上)
チベ級高速重巡洋艦	235m	113.2m	99.4m	1万6000t	熱核ロケット・エンジン×5 (異説、熱核ロケット・エンジン3×2)	3連装メガ粒子砲×2、2連装機銃×18、ミサイル発射管×12	MS×8 (異説9、12、16、数機)
パゾク級輸送艦	260m	――	――	――	――	――	――

モビルスーツ・モビルアーマー

名称/型式番号	開発工廠	全高	本体重量	ジェネレーター出力	スラスター推力	装甲材質	武装
ザクⅠ/MS-05	ズム・シティ	17.5m	65.5t	899kW	4万700kg	超硬スチール合金	ザク・マシンガン、ヒート・ホーク、ザク・バズーカ
ザクⅡ/MS-06F	ズム・シティ	17.5m	56.2t	976kW	4万3300kg	超硬スチール合金	シールド、ヒート・ホーク、ザク・マシンガン、ザク・バズーカ
リック・ドム/MS-09R	グラナダ	18.6m	43.8t	1199kW	5万3000kg	超硬スチール合金	ヒート・サーベル、拡散ビーム砲、ジャイアント・バズ
ゲルググ/MS-14	グラナダ	19.2m	42.1t	1440kW	6万1500kg	超硬スチール合金	ビーム・ナギナタ、専用ビーム・ライフル、専用シールド
ジオング/MSN-02	ア・バオア・クー	17.3m	151.2t	9400kW	18万7000kg	――	頭部メガ粒子砲、本体メガ粒子砲×2、頭部有線誘導5連装メガ粒子砲
ビグロ/MA-05	キャルフォルニア・ベース	45.5m	125.5t	1万7800kW	13万6100kg	――	大型メガ粒子砲、クロー×2、ミサイル×8

戦闘機

名称/型式番号	全長	全幅	全高	全重量	最高速度	機体材質	主装備
ガトル	――	――	――	――	――	――	――



Principality of Zeon force

ア・バオア・クー戦、ジオン公国軍投入兵器データ一覧

新たなる戦争へ～デラーズ紛争とグリプス戦役

最後の公国軍残党が描いた“星の屑”～デラーズ紛争

一年戦争が終結してもなお、地球圏に争乱の種は尽きなかった。戦いの果てにジオン公国が遺したものは、地球連邦政府が考える以上に根深いものだったのである。その代表的な例が、U.C.0083年に勃発したデラーズ・フリートの決起であろう。

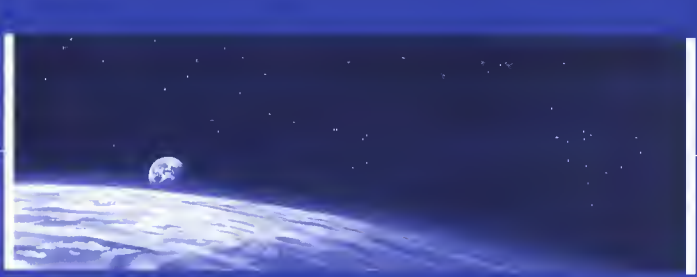
ア・バオア・クー攻防戦の敗北によって、ザビ家によるジオン公国の支配体制は崩壊した。U.C.0080年1月1日、共和制に移行したジオン共和国臨時政府は、地球連邦政府との間に終戦協定を締結。しかし、この時点でサイド3のジオン本国とグラナダにはまだ地球連邦軍に対抗しうる戦力が残されていた。これに拠る抗戦派は、臨時政府の指揮系統から離れて独自の行動を開始し、カラマ・ポイントへと集結する。彼らにとって、共和国臨時政府は「連邦の傀儡政権」であり、その政府によって結ばれた終戦協定は無効であると見なしていた。エギーユ・デラーズによる宣戦布告の演説の際、彼が共和国臨時政府を指して「売国奴」と称していたことからも、その認識が窺えよう。

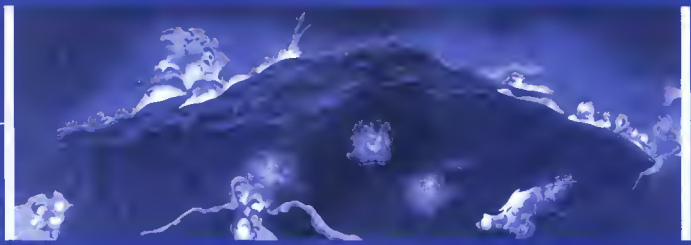
カラマ・ポイントに集結した公国軍残党は「ジオン独立戦争は継続中である」という共通認識の下に成り立っていたが、結果的にはふたつの勢力に分かれることとなった。ひとつはアステロイド・ベルトの小惑星基地アクシズへの退亡を図り、戦力の建て直しを図ろうとする者たち。もう一方は、地球圏に残って連邦政府への抗戦を続けようとする者たちである。後者の勢力を糾合して中心的な存在となったのが、ア・バオア・クー攻防戦においていち早く戦線を離脱したデラーズであった。彼はこの時点で中将に昇進し（昇進時期については異説あり）、艦隊を再編してサイド5の暗礁宙域へと移動。艦留基地“茨の園”の設営を開始したのである。

デラーズ・フリートは“茨の園”の設営を進める一方で、U.C.0081年の8月から9月にかけて月面都市やサイド6へ降下の将兵を潜伏させた。それとほぼ同時期の8月15日、ジオン公国国慶節に合わせてゲリラ活動を開始する。彼らのこうした活動が許された背景には、地球連邦政府の徹底されない戦後処理があったといえよう。また、デラーズはU.C.0081年11月、一旦は袂を分ったアクシズの勢力と共闘の約定を取りつけていた。この関係によって、デラーズ・フリートの蜂起の際にはアクシズから先遣艦隊が派遣されている。

デラーズ・フリートは、地球圏に留まった公国軍残党の中では最大の戦力を有していた。しかし、彼らが敵とする地球連邦政府は、U.C.0081年10月13日の連邦議会において「連邦軍再建計画」を承認し、戦力の整備を進めていた。地球連邦軍の安定化に危惧を抱いたデラーズはU.C.0083年3月、戦略目的を戦力の維持からプロパガンダに移行し、それに即した反攻作戦の立案を開始した。立案に先立って地球連邦軍の「ガンダム開発計画」の情報を掴んでいたデラーズは、この計画によって開発された核弾頭装備のMSを作戦に組み込むことを画策する。こうして7月30日に完成した作戦計画が“星の屑作戦”である。

この作戦計画に基いて実施されたデラーズ・フリートの軍事行動は、のちに「デラーズ紛争」と呼ばれた。一年戦争の終結から3年後、この争乱は地球圏の仮初めの安定を覆す大事件へと発展することになるのである。





ティ　　の専横とエウーゴの台頭～グリプス戦役

U　　　"　　　"　　成功"　　U　　崩壊　　　最も第　　　成　　と
　　　　　　の不満を生み　それは転　て　　　対する不　　な　　　　　　地球連　の内　　　　　　

ジオング本来の搭乗者は？
——ニュータイプ用MSゆえの欠点

地球連邦軍の技術の結晶がRX-78ガンダムならば、ジオン公国軍の先端技術を結集して開発されたマシンがMSN-02ジオングである。

ジオングの持つ、合計13門ものメガ粒子砲が極めて強大な火力を発揮することは想像に難くないが、冷静に考えてみれば、それだけの数のメガ粒子砲を同時にコントロールすることは容易ではない。勿論、一門ずつ使用すればこの問題は解決するが、それでは13門ものメガ粒子砲を装備する意味は薄くなってしまう。複数の目標を同時にロックオンできる照準装置が有れば問題ないが、そのようなシステムを装備した機体は少ないし(ジオン軍の試作MAアプサラスIIが、複数の目標を捕捉・攻撃できたらしい)、敵味方が高速で動き回る宇宙戦では、複数の目標を追尾し続けるのは至難の技だろう。だが、それを解決する手段がある。常識を超えた空間把握能力と予測能力を持つ人間、つまりニュータイプをパイロットにすることである。そう、ジオングはニュータイプ用に開発されたMSなのだ。

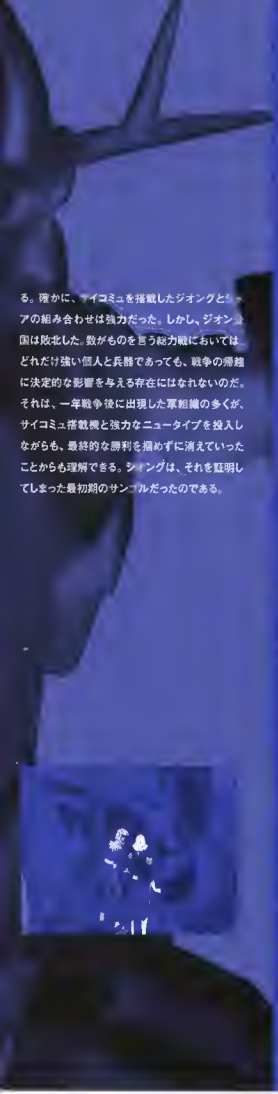
聡に似い動や洞察力を持つ人間がいるが、それは経験から導き出されるもので、初見の事態には対応しにくい。しかし、ニュータイプと呼ばれる人間は、初めて遭遇する事態であっても動というレベルを超えた予測能力や空間把握能力を発揮す。一年戦争末期のアムロ・レイが、ソーラ・レイの発射を予知したり、背面の敵に反応したりしたのが、細的なニュータイプ能力の例である。このような能力を持った人間でなければ、複数のメガ粒子砲を同時に使うことなど不可能であろう。しかも、ジオングは2基のサイコミュ制御式有線ビーム砲(独目の機動力を持ったビーム砲台)を持つ。これは、本体とは別の場所から攻撃可能な兵器であるが、基本的にオートで目標を追尾するモノではなく、パイロットが脳波で制御しなくてはならない。つまり、ビームの発射タイミングだけでなく、有線ビーム砲の機動までもコントロールする必要があるのだ。貴方は、空中戦をやりながら、2発の有線ミサイル(当然、マニュアル操作である)を目標に指向することができるだろうか？　3つの四則演算の答えを同時に出すことができるだろうか？　ジオングをフルコントロールするということは、それだけ難しいことだといえよう。

ア・バオア・クー戦に投入されたジオングは、ニュータイプに覚醒したシャア・アズナブル大佐によって操縦されたため、サイコミュ制御の有線ビーム砲を使いこなし、アムロ・レイのガンダムと互角に戦うことができた。しかし、ここで疑問が湧いてくる。ジオン軍はニュータイプ研究機関であるフラナガン機関を擁していたことからも理解できる通り、ニュータイプの軍事利用に関する研究は進んでいた。だからこそ、ジオングやMAN-08エルメス等の高度なサイコミュ制御式兵器を搭載したニュータイプ専用機を開発できた。だが、実戦に耐え得る＝サイコミュ制御の機体を操れるニュータイプは、どれだけ存在していたのだろうか？　実戦に参加したジオン公国軍所属のニュータイプは、現在判明している限りシャア・アズナブル、ラフォ・スン、シャリア・ブルの3名である。未確認ながら他にもクスコ・アルやイアン・グレーデン等数名のニュータイプが在籍していたようであるが、それを合わせても10名にも満たないと考えていいだろう(フラナガン機関には相当数の"被験体"が存在したが、実戦に参加していない者は除外した)。しかも、ア・バオア・クー戦の時点での生存を確実視できるのは、シャア唯ひとりである。ということは、ジオン軍にはニュータイプ専用機は存在しても、それを操縦するニュータイプがほとんどいないということになる。実はニュータイプ専用機の最大の欠点といっていいのが、このパイロット不足なのである。ジオングも数機が生産されていたようであるが、実戦に参加したのはシャアが搭乗した機体だけとなっている。ア・バオア・クー工廠に搬入されていたのが、この1機だけであったようだが、他のジオングが運び込まれていたとしても戦力化は難しいと言わざるを得ない。ニュータイプ専用機だけは、強力だから大量に配備するという訳にはいかないのだ。

実戦に耐え得るニュータイプの絶対数の不足は、ニュータイプ専用機に付きまとう問題で、これを解決するために人工ニュータイプ＝強化人間の研究が進められた。だが、"素材"にはニュータイプの素質が必要だった上、完成した強化人間は精神的な安定性に欠け、パイロットとしては非常に使い辛いモノとなってしまった(高レベルの覚醒を果たしたニュータイプを強化する場合は、少しの処置で済むためかメンタル面での障害は少ないが、希少なニュータイプを必要としている時点で本末転倒である)。

更に問題なのは、それだけ苦労して手に入れたニュータイプとサイコミュ搭載機があったとしても、多くの技術者や軍人が夢想したような結果＝戦争での勝利には必ずしも直結しないということであ

Mobile Suit column 06
MSN-02 ZEONG
モビルスーツコラム　MSN-02　ジオング



る。確かに、サイコミュを搭載したジオングとシャアの組み合わせは強力だった。しかし、ジオン公国は敗北した。数がものを言う総力戦においては、どれだけ強い個人と兵器であっても、戦争の帰趨に決定的な影響を与える存在にはなれないのだ。それは、一年戦争後に出現した軍組織の多くが、サイコミュ搭載機と強力なニュータイプを投入しながらも、最終的な勝利を掴めずに消えていったことからも理解できる。シャングは、それを証明してしまった最初期のサンプルだったのである。

MSN-02　ジオング

**実力はガンダムと互角、
トリを飾った未完のモビルスーツ**

もし、完成体であったならば、ガンダムに勝っていたのではなかろうか……と思わせるほどに、壮絶な散りざまで鮮烈な印象を残したジオング。ガンダムとの戦いで己の体を失い、頭部だけになっても最後まで互角に渡り合った死闘は後世に語り継がれる名勝負と、周囲から称されている。そして、相討ちながらもガンダムに引導を渡したことで＜ジオング最強説＞を打ち立てたことも特筆されよう。ビッグなボディから繰り出される圧倒的な攻撃力が＜ジオング最強説＞を支えている大きな要因であることは言うに及ばない。しかし、未完であるが故に見る者の想像力を大いに刺激する外的イメージを持っていることも確かといえよう。つまり、存在自体が「ジオングの強さは、計り知れないものがある」という無言の説得力を放っているのだ。内部構造むき出しの両上腕部が、そのことを補足している。

Figure "MSN-02 ZEONG" Manual

付属フィギュア解説　MSN-02　ジオング

シリーズ最大のボリューム！

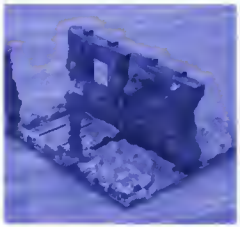
ジオングの魅力は、その巨体といえるだろう。これまでのフィギュアと同様、1/220スケールで統一し、その大きさを再現。他のフィギュアの約1.5倍のボリュームになっている。まずは、手に取った時のズッシリ感を楽しんで欲しい。また、細かい塗り分けや、パネルラインでその巨大感をさらに増すことに成功している。

ボールジョイントにより、脚部、肩、腕部、腰部が可動。頭部、腕部は取り外して、オールレンジ攻撃を再現することもできる。腕部の裏にバーニアのモールドがしっかりと施されているところにも注目して欲しい。頭部は付属の透明支柱につなげることも可能となっている。

本巻でフィギュア、ジオラマベースがすべて揃うこととなった。これで一大ジオラマを完成させることが可能に。次頁の組み立て方を参考に、自分だけのア・バオア・クーを作ってみよう！

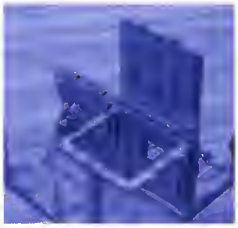
ラストシューティング再現ジオラマ作成法

今回の6巻で、すべてのフィギュア、ジオラマベースが揃った。ここではア・バオア・クーシリーズの完成型「ラストシューティング再現ジオラマ」の作り方を詳しく紹介する。



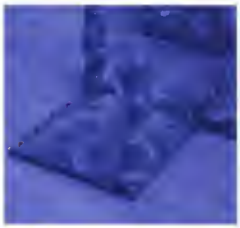
1

まずは、1、2、3、5巻に付属のジオラマベース（以下ベース）を写真のように組み合わせる。



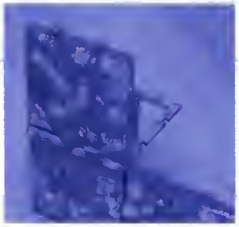
2

6巻に付属のベースは、5巻付属のベースの上に結合させる。



3

4巻付属のベースは、土台と壁のパーツを分離、土台のパーツを3巻付属のベースに取り付ける。



4

余った壁のパーツは、同じく4巻に付属しているアタッチメントを取り付け、6巻付属のベースの壁パーツに結合させる。

5

続いて、ラストシューティングギーブのガンダムを作成。4巻付属の各パーツを写真のように組み合わせる。

6

2巻付属のガンダムの頭部、腕パーツを外し、右腕に5で作ったパーツを付ける。

7

6で完成したガンダムを5巻のベースに置き、その他のMSを配置して完成！

Figure Manual Special

付属フィギュア、ジオラマベースの楽しみ方

完成型

この形以外にも組み合わせは自由。いろいろと組み替えてみて、自分だけの「ア・バオア・クー」を完成させよう。

●付属フィギュアの楽しみ方

1.ポーズをとらせる

各関節が可動し、細かな表情を付けられるのが、本シリーズ付属フィギュアの最大の特徴といえるだろう。ボールジョイント部を一度引き抜いて、引き抜いたボールジョイント部を浅く固定すると、より大きなポーズをとることができる。

2.複数並べてみる

量産型の機体が何機も並んでいる姿は兵器としてのモビルスーツの魅力といえるだろう。ゲルググ、ザクには中隊長用の角が付いた頭部が、ガンキャノンには機体ナンバーのデカールが付属している。複数並べて、1中隊を表現してみよう。

3.パーツを組み替える

ガンダムの右手首とジムの右手首のように、各フィギュアのパーツには、ある程度の互換性がある。それを利用して、ガンダムにハイパー・バズーカを、ジムにビーム・ライフルを持たせることが可能。いろいろと試してみよう。

4.ちょっとした加工でグレードアップ

どのモビルスーツにも細かなパネルラインが施されている。ここにスミ入れをすることで、簡単にリアル感を増すことができる。また、腕に自信のある人は、色を塗り替えて、「シャア専用ザク」や「G-3ガンダム」を作ってみよう。

GUNDAM OPERATION

A·BAOA·QU

ア・バオア・クー レポートvol.6 データ編

C O N T E N T S

ア・バオア・クー戦とは何だったのか？ 2

戦後のモビルスーツ 4

ア・バオア・クーから終戦協定に至るまでの概略 12

終戦協定、軍事裁判、戦後の経済について 14

一年戦争後の地球連邦軍、ジオン公国軍 16

主要キャラクターのその後 18

アムロ・レイ 18

ブライト・ノア 19

ホワイトベース・クルー 20

シャア・アズナブル 22

ジオン公国軍人士官 23

宇宙世紀用語辞典～ア・バオア・クー戦～ 24

ア・バオア・クー戦データ集 30

新たなる戦争へ～テラーズ紛争とグリプス戦役 34

モビルスーツコラム MSN-02 ジョング 36

付属フィギュア解説 38

次号予告 43

2004年5月25日発行 トイブックコレクションシリーズ ガンダムオペレーション ア・バオア・クーvol.0006

発行人 小松崎博一 編集人 滝保謙次 企画・編集 株式会社セイカ トイブック事業部

発行・発売 株式会社セイカ 〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-8 安原岩本町ビル 電話 03-5295-4545 編集

トイブックホームページアドレス http://www.toybook.jp 印刷所：図書印刷株式会社

デザイン 製作管理 内山博之 フック 執筆 塚口達仁 杉山和繁 エディトリアルデザイン 有限会社ロケットハンチ イラスト 中村淳

アートディレクター 関場賢行 撮影 スタンオアール、中村浩 撮影協力 月刊オビービージャパン ハンケーシデザイン 神谷晃智子 プレインナビ

協賛協力 杉原亮由、大矢直人(プレインナビ) 監修 株式会社サンライズ

●本書は著作権上の保護を受けています。本書の一部、あるいは全部について株式会社セイカ トイブック事業部の承認を受けずに、いかなる方法においても無断で複写、複製することは禁じられています。●乱丁本、落丁本、増刷時における欠品及び破損は、小社読者管理室 03-5820-3743 までお問い合わせください。送料弊社負担にてお取替えいたします。

製作 エースエンジニア・サンライズ ISBN 4-902399-05-9 Printed in Japan, Made in China

GUNDAM OPERATION

ジャブロー編

7月発動!!

第1シリーズ"ア・バオア・クー編"同様、緻密なフィギュアと、一年戦争の地上戦を詳細に解説するブックレットで構成。

2004年 7月25日 発売予定

※写真のジャブロー編ジオラマ&フィギュアは試作品につき、実際の商品と異なる場合があります

第1シリーズ完結！6巻揃えれば「ラストシューティング」を表現可能！！

GUNDAM
OPERATION

ア・バオア・クー レポート

0000

データ編